



社会福祉法人 聖隷福祉事業団
 総合病院 聖隷三方原病院
 聖隷おおぞら療育センター

〒433-8558
 静岡県浜松市北区三方原町3453
 TEL 053-437-1467

発行責任者 荻野和功
 編集者 横地健治

2016年6月1日

ことばのない人の聞こえの世界

横地 健治

人はことばを介して他者とコミュニケーションを行います。よって、健常者の聞こえの世界では、ことばが大きな位置を占めています。これに対し、重症心身障害の多くは有意な言語理解がありません。それでは、この人たちの聞こえの世界はどうなっているのかを考えてみます。これは最適な活動を提供する上で不可欠なことだからです。

聞こえの世界を知るため、見えるものについて先に考えてみます。私たちの前に犬がいて、それを見たとします。私たちはすぐ「犬」を意識します。目に入る情報は、膨大な情報の情報だけです。これを犬と認識するのは、脳がこの過程で、「犬」という言語とつながります。「犬」は脳内に生まれつきあるものではありません。生前からある神経機構を基礎として、生後、その人の属する社会で、発声と聞き取りの経験を積んで獲得されたものです(多くは「ワンワン」を経て)。なお、ろう者はこれとは別です。この「犬」によって、眼前の犬の

意味を素早く認識します。見るとは、このように学習の結果です。なお、見る世界には意識に上らない世界もあります。歩いていて、足下に小さな障害物があっても、無意識に避けます。この場合、障害物の視覚情報はそれを回避する運動機構に適切に伝達されず、見えますが、それが何だったのかは知りません。それでは、「犬」を獲得する以前では、犬はどう見えるのでしょうか。四つ足の形の線と色の情報が入るだけだと思います。さらに、犬の回りにあるものの線と色が重なっているはずですが、これでは見えただことになりません。

見ると比べると、会話以外の聞こえの世界はわかりにくいものです。目をつむって、犬の鳴き声だけを聞いたとします。犬と似ていると思えば、犬の鳴き声として、「犬」の言語概念に結びつくでしょう。このように、聞こえたものに名前がつけられるなら、その言語概念のもとで、聞こえるものを理解することになります。誰々さんの足音、雀の鳴き声、パトカーのサイレン、

川のせせらぎ、台風の風音等々。しかし、見たものの言語概念と比べれば、かなりおぼろげであり、他者との共通認識の程度は少ないでしょう。

それでは、名前のつかない音はどうでしょうか。そもそも、音は向こうから飛び込んでくるものです(見つけて見るとは対照的です)。そのため、非常事態のサイレンといった警戒を促す信号としても使われています。自然の中でも、日常的に発生する音と違った大きい音(嵐、雷等)は危機につながるものです。これらは、注意を喚起する意味はありますが、音そのものの意味は希薄です。なお、こうした音は、心地よい音とは対極にあります。

音を聞いて、それが精神活動として意味を持つものは、「音楽」と言ってもいいでしょう。「歌」は歌詞の言語世界と不可分に結びついていきます。よって、歌詞の意味がわからなければ、歌う声は楽器のひとつということになりません。また、歌は社会的な意味を持つこともあります。例えば、「君が代」は歌詞の理解とは無関係に荘厳な儀式とながっています。民謡の多くも、その社会的営みを背景に持っています。こうした社会

文化の枠外にある人には、歌の意味は変わってきます。歌詞の言語と社会文化的背景を除いたものが、純粹な音楽だと私は考えます。これは、音の周波数、音の大きさ、その繰り返し方(リズム)、その並び方(メロディ)などに特徴づけられたものだと思います(これは、前述の言語習得前の見える世界に近いものではないでしょうか)。重症心身障害児(者)に提供して価値があるのは、この純粹音楽だと私は思います。

この純粹音楽の中にも、人により好き嫌いはあるでしょう。それを考えるには、純粹音楽の持つ意味について、その社会の人が共有できる名前が必要になります。前述の「犬」に戻ります。犬を見た人は、自分が見た犬は、その社会の人が犬として見ているのと同じだと確信しています。こうした名前を純粹音楽にも必要だと言うことです。しかし、そもそも音楽には明確な名前がつけられていません。前述の「君が代」では、その名のもとに、おぼろげなリズム・メロディーの共通認識はあっても、「犬」の名が持つような意味の明確さはありません。歌詞がなければ、符帳がつくだけです(例え